かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311

教祖120年祭を目指し、
道の後継者の育成を念頭に邁進しよう。

学生層育成者講習会講話

学生一人一人に、月に一度は声をかけよう

本部学生担当委員　松村登美和 先生

本日は育成者講習会ということで、「学生一人一人に、月に一度は声をかけよう」ということをお願いしたいと思います。

学生層の育成といっても、実際、何をどうしたらいいのか、また、学生層の育成というのは難しい、厄介だと思ってしまいますが、とりあえず、学生に月に一度声をかける、まずそこから始めようという話しです。

十のもの半の理で九つ半まで消す

学生層の育成についてお話しするとき、よく引き合いに出されるおさじづがあります。

「明治二十六年六月十九日、平野トラ身上願」というおさじづですが、

（前略）日々という。遠く所より又年の寄らん者一寸や。若い者寄り来る處厄介、世界から見れば厄介。なれど道から厄介ではない。道から十分大切。道は遠かろが言わん。たすけ一條と言う。これ聞き分け。十のもので九つ半大切にして、半分だけ出けん。十のもの半の理で九つ半まで消す。よう聞き分け。喜ぶ者は少ない。成る事情いんねんである。いんねんというは面倒いなる者も寄せる寄せる。皆運ばすも同じ理、出て救けるも内々で救けるも同じ理、いんねんならどんな者もいんねん。道の處は重々掛かり、これから先掛かりの者そこで入り込む。年の行かん者我子より大切、そうしたなら、世界からどういう大きい事に成るやら知らん。すれば、そんだら何が間違うてある。日々という、言葉一つという、これ聞き分けてくれるよう。

明治二十六年ごろは、非常に教勢があり、どんどん外へにをいがけに出ていたときでしたが、郡山の教会ではいろんな身上・事情の方を預かっておられ、平野トラ奥様が、その方々の面倒を見なければなりませんでした。当時は、「外に出て行ってなんぼ」の時代で、教会の中でずっと人の面倒を見ることが布教だとは思ってもらえませんでしたので、ある若い方を教会で預かるという話しになったときにも躊躇されたようです。

このおさじづでは、若い者というのは、世間一般で見れば厄介だけれども、お道の上から考えたら、厄介ではなく、とても大切だと神様が仰る訳です。

おたすけを全部で十とすれば、外に出てのにをいがけ・おたすけは九つ半で、残り半分ができていない。それは何かと言えば、つながった人達の後継者を育てるということ。これをしなければ、いくら一生懸命、外ににをいがけに廻っても、代が変われば、全部ごっそりいなくなってしまうから、また一からやらなければいけないということを、このときに、すでにご指摘くだされています。

若い者を、喜んで中に入れて育てていく人は余りいませんが、長い目で見たときに、学生に限らず、道の後継者の育成は、本当に五分五分で大事なことだと思います。

思春期・反抗期は、丹精の絶好期

こどもおぢばがえりには、少年会員だけで、例年十五万人くらいの帰参者がありますが、十五歳までですから、一学年あたりで考えると一万人の子供がおぢばに帰っている計算になります。ところが、春の学生おぢばがえりには、今年はちょっと多くて四千七百名の学生さんが帰られましたので、高校・大学の七学年でならべると一学年六・七百人になります。こどもおぢばがえりの十五分の一程度です。

そこで、少年会から育ててきたそれぞれの子供達の育成が、教会でできているかと考えると、子供の頃は、おとまり会やおぢばがえりに来てくれていた子供達が、小学校の高学年くらいから、だんだんと足が遠退いてくるのが分かります。

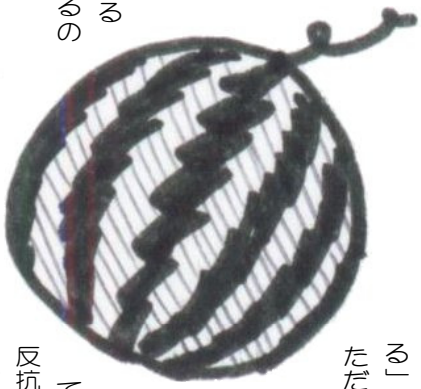
クラブ活動だ、塾だ、アルバイトだということで、昔は来ていたのに、だんだん見なくなる。二・三年経って高校・大学に入ると、偶然出会っても、姿形から大きく変わってしまっている。会長としたら、昔のように声をかけにくくなるということもあるでしょう。

この辺も、月に一度声をかけ続けるということは、大きいメリットがあるのではないでしょうか。

もう一つ言えるのが、「昔は素直だった　のに……」ということが頭に浮かぶでしょう。昔は素直だったのに、最近文句を言うとか、親の姿を批判するとか、いろいろあるでしょう。そうこうして上手く答えられなくて放っているうちに、何となくどこかへ行ってしまうこともあるのではないでしょうか。

その子達が、親なり教会から、ちゃんと神様の話しを聞いているかといえば、なかなかそうでもないでしょう。

そんなとき、我々が思ってしまいがちなのが、「いずれわかってくれる」、「親が一生懸命やっていたら、親の姿を見て、いつか気が付いてくれる」、「事情が起きたときに、またお道に帰ってきてくれる」というようなことで、これは希望的観測なのではないでしょうか。



しかし、この「子供達が親に対する批判を言いだす」、「昔は素直だったのに変わってくる」というのは、我々の目から見ればただの厄介な姿ですが、人間が育っていくうえで、当然越えていかなければならないハードルだと思います。

子供達というのは、小さい頃は、親の言動をそのまま見て育っていくので、「心をうつす」ように育てましょうといいますが、思春期・反抗期の十四・五歳の頃になると、子供達は、親から無条件に受け入れてきた、ものの考え方を、一回全部チャラにする、これが人間の心理的な成長の正しい在り方だと言われています。

どんな子でも、遅かれ早かれそういうときがやってくる。それは何かと言うと、それを通り越して批判するということは、自分の中で考えている訳です。

「親はこう言ってるが、本当にそうなんだろうか？俺はここがおかしいと思う。」というのは、反抗しているだけではなくて、彼らが自分自身でその答えを探している時期なのです。

その時期に、大人が中途半端な姿を見せたり、怒ってごまかしたりすると、これは逆効果だと思います。

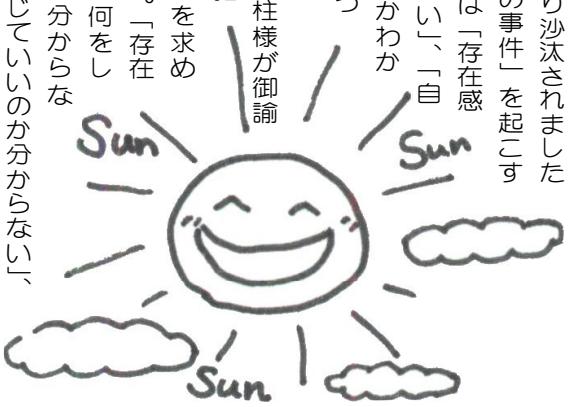
「何かきれいなこと言ってるけど、やはり中身は違うやないか」と子供は思ってしまう。

彼らが反抗する時期というのは、我々にすれば丹精をする絶好の旬であり、また、彼らにとっても成長していく絶好の旬である。我々大人が、その時期を何となくやり過ごしてしまうというのは、みすみすその好機を見逃しているということになるのではないでしょうか。

伝道の極致は求道

一時期、「オウム真理教」や「法の華三法行」に若い人達が大勢入りました。また、「十七才の事件」というのが取り沙汰されましたが、「十七歳の事件」を起こす子達の言い分は「存在感を感じられない」、「自分が何者なのかわからない」ということです。

彼らは、真柱様が御諭達で仰る「確かな拠り所」を求めているのです。「存在感がない」、「何をしたらいいのか分からない」、「何を信じていいのか分からない」、



これが絶対だという何かを求めている。その結果、オウム真理教や法の華三法行に行ってしまうのではないでしょうか。

そんな中で、我々はこのお道の教えをしっかりと聞かせていただいているのですから、それを伝えていかなくてどうするのかと思います。

もう一つ、学生層の育成ということで、厄介と思いがちなことは、例えば、「お父ちゃん、陽気ぐらし陽気ぐらしって信者さんには言ってるけど、家族の前ではいつもプンプン怒ってるなぁ」というような親の姿に対する疑問です。

言われる方にとったら厄介ですが、ここが大事なところで、いったい何が学生さんに伝わっていくのかといえば、布教にしても縦の伝道にしても、やはり自分自身の信仰ではないかと思います。

今、学生生徒修養会が評価をいただいていますが、それは何かと考えてみると、スタッフの正面きった人間性とでも言いましょうか、学生達に対して、自分の間違っている所・わかってない所も全部さらけ出して、共に育とうとする姿勢が伝わっているのではないでしょうか。

天理大学成人会が発会した昭和二十八年、二代真柱様は「伝道の極致は、口先で云々することではなく道を求めることである。伝道の極致は求道だと思うのであります。究極的には、求める態度をそのまゝ伝える、すなわち伝道即求道なのであります」というようなことをお話しくださっています。

これは、布教にしても縦の伝道にしても、結局、伝わっていくのは自分の姿勢だということです。

学生層の育成も一緒で、厄介だ厄介だと思っているとき、一番厄介なのは、大人自身のそういう癖性分・弱さ、それが厄介なのではないでしょうか。厄介だと思ったときにこそ、自分の信仰を試されている、また、自分の信仰を学生が育ててくれているというくらいの気持ちで育成に当たっていくと、その学生さんは育っていくのではないでしょうか。

まずは、学生会の行事を活用しよう

同じくらいの年代の学生さんが何人かいて、そこでいつもわいわいとやっていけるような環境であれば、教会でも学生を育成できるでしょうが、実際は、やはり難しいでしょう。

大教会に集めてやろうとしても、大人と生活範囲の違う高校生ではなかなかそうもいかない。

やはりその地域・教区やおぢばで行事があるときに、とりあえず参加させるだけでも大きい効果はあると思います。

天理教学生会の行事によく参加する子達に「何がそんなに楽しいのか」と尋ねると、「天理教をしている仲間がいる」という答えがよく返ってきます。同じことに悩み戸惑っている仲間がそばにいるという安心感でしょう。

学校では、信仰に対する思いを友達には話せないし、話しても分かってもらえない、普段は信仰について話しができる仲間がいないけれども、学生会にはそういう仲間がいるからそこへ行く、安心して自分のことを出せる、悩みを聞けるということです。

学生会の行事を通して大きな御守護をいただき、信仰をつかんでいったとか、道から離れようとしていた子が学生会の行事を通して立派なよふぼくへと育っていったというような話しは珍しくありません。

そういう育ちの場が、学生の集まりにはありますので、是非お声をかけていただきたいと思います。来る来ないではなく、まず教会として、学生に声をかけていただく第一歩として、おぢばや教区の行事を使っていただけたらと思います。

声をかけてからその芽が吹いてくるのは、十年先かも二十年先かも分かりません。

学生層の育成というと、どうしても高校大学の内にどうにかしようと思ってしまいがちですが、そうではなくて、長い目で人を育てて行く、そのための第一歩をこれから始めるんだというお気持ちで、月に一度は、学生さんを見付けて声をおかけいただきたいと思います。

5月12日
全教一斉ひのきしんデー

輝美濃分教会長　谷内伸自

やればできる

二日前の予報では高い降水確率でしたが、前日にはゼロ%と変わり、当日十二日は清々しい好天に恵まれ心地よいひのきしん日和となりました。頂上に岐阜城がそびえる金華山の麓、岐阜公園が会場でした。

三ヶ所に設けられた受付には次々と参加カードを出して、記念の軍手とティッシュをもらい、ホウキを手にゴミを集める人、しゃがみこんで楽しく語らいながら草を引く人、若い人の中には川の中に入って空き缶を拾っている。思いくに作業が進められました。

たまたま知事さんが犬の散歩をされていましたので声を掛け、しばらく立ち話をさせてもらい、毎年この時期にひのきしんをさせて頂いていることなどを話しました処、大変喜ばれ、感謝して頂きました。一緒に写真にも収まって下さいましたので嬉しい限りでした。記念品を差し上げ、参加カードにも記入していただきました。新聞社の取材も受け、翌朝刊に載っており、にをいがけの一助になった事と思います。

この日の目標千三百人を掲げておりました処、一二六人が参加して下さり感激でした。

全教会へ巡回をさせて頂き、管内ようぼくを対象にした機関誌を通し、更には全ようぼく家庭へ案内ハガキを出すなど、あらゆる手だてをしたことが功を奏したのではないかと思っております。

私共の教会でも、当日朝にも電話を掛けたりして呼びかけを行いました。二月に生まれた赤ちゃんを抱いて参加してくれた若いお母さん。普段は何処へも行かない八十八才の私の母も楽しく参加してくれました。

表統領先生のメッセージの中で「ひたむきにひのきしんに励む喜びの姿は、いずれ多くの人々の喜びとなり、陽気ぐらし世界実現のご守護を頂くもとになると信じます」と仰有っています。いつでも何処でもひのきしんをさせて頂ける自分でありたいと思います。

翌週十九日には、組で会場を設けており共々に参加させて頂きました。ひのきしんの途中から小雨になりましたが、誰ひとり止める者がなく、黙々と除草に励んでいました。四会場合わせ六百を超える参加者があり、前回を合わせ千九百余の多くの人々に参加して頂きました。心定め二千名には届きませんでしたが、一昨年が八百人、昨年は七百人だったことを思えば、倍以上になり努力の甲斐がありました。

次々と親から流して頂く御声を素直に受けとめ、お応えさせて頂く努力を今後もさせて頂きたく思っております。

5月25日・26日
青年会笠岡分会自転車団参

佐藤真孝

去る五月二十四日夜、自転車団参に参加すべく十数名の青年会員が大教会の青年会室に集いました。

そもそもこの自転車団参を企画した目的は、新委員会発足にあたり委員の心を一つに揃える為のものでしたが、新委員会に賛同して下さる会員さん、OBの方も加わり更に勢いづきました。

翌朝四時、一同が道中の無事を祈念してのお願いづとめの為神殿に集まろうとしたとき、委員の平盛さんが栄養ドリンクをかかえて激励に来て下さいました。彼は残念ながら今回の団参には都合がつきませんでしたが、このような心寄せで我々の士気は大いに高まり、夜明けを待たずして一路おぢばへと旅立ちました。

一行は備前付近までは大したアクシデントも無く、順調にペダルを踏み続けていたのですが、船坂の峠にさしかかった頃より、次第に遅れをとる者が出てきました。

そして姫島まで来たときついに、二、三名の者が体力の限界を訴えました。そこで森本孝志副委員長が主だった委員を呼び寄せ、この度の自転車団参の意義を問い直し、傷ついた方々への配慮、という点において心を一つにさせて頂こうと呼びかけました。

そうしてある者はおさづけを取り次ぎ、又ある者は励ましの言葉をかけ、傷む箇所を懸命にさすってあげたりと、お互いの出来る限りを尽くしました。

その甲斐あってか、体力の限界をとうに越えているはずの方々が驚異的な頑張りを見せ、二十六日祭典中、ついに全員でおぢばに到着することができました。南門前で神殿に向かって一礼すると、誰からともなく互いに握手を交わし感涙にむせんでいました。

その後、南礼拝場にてお礼のおつとめを済ませ、私たちは今回の自転車団参のもう一つの目的を果たす為に青年会本部へと向かいました。実はこの度の新委員会の方針として、布教と求道を推進する上から是非とも全分会布教推進週間の初日に総会を開催すべく、委員会例会にて話をまとめていました。しかし青年会本部の委員さんにその旨を打診したところ、総会願書の提出を控えるように、との提言がありました。そして再度例会にて練り合い、やはり却下されることを覚悟で布教推進週間の初日開催の願書を提出しようといういきさつがありました。

一行は青年会本部に到着すると、本部委員長さんにお会いし、総会開催についての主旨を申し上げ願書をお渡ししました。それから三日後、「どうでもこうでもという笠岡分会の皆さんの思いを受け取りました。総会開催という方向で話を進めて下さい。」との連絡を青年会本部より頂きました。

私たちの新委員会は今、ようやくスタートラインに立ちました。

5月22日・23日
全委員部長講習会

婦人会

五月二十二日、二十三日の二日間にわたって開催しました。初日には、大教会長様より道の台としての婦人の在り方や、日々の心遣いなどについて懇ろにお話をいただきました。

続いて、笠岡市教育相談室の髙田芳信氏が『現代の親と子の関係』といったテーマに基づき、不登校児童や児童虐待といった昨今の問題の根底にあるものを、例をあげて説明しながら話しました。子供を不幸せにする一番手近な方法は、欲しがるものを何でも与えること、又、親が子に手をかけすぎることが結果として子供のやる気をなくすことになる等、子育てに悩む親へのお救いに役立つ話でした。その後、年代別に分かれてのねり合いをしました。夜は、門脇加津(島根)、中村満子(久松)、虫明好美(陽備)の感話をききました。

翌日、大教会奥様のお話に先立って、上原順子(陶山)が、「世界がもし100人の村だったら」という本を紹介、年二回のバザーに関連しての衣料救援活動は、国際救援活動の一つとして、私達にできるささやかな世界救けであることを話しました。大教会奥様は、四月の第84回婦人会総会における真柱様のお話をもとに前婦人会長様の御遺志に応えさせていただこうとの思いを熱く述べられました。この後、奥様のお話及び昨年度の活動について等の班別ねり合いを行ない、後に全体に発表して閉講しました。

受講生にたずねたアンケートには、二日間教会を留守にすることの大変さと、合宿したことでお互いに親しくなり楽しかったという両方の気持ちが表わされていました。きっとこの貴重な二日間に学んだ数々のことが、今後各教会の道の台としての活動に生かされることと思った次第です。

こころの詩

寒桜　うす紅に　季節つげる
雛もささやく　午後のひと時

薫風を　得て舞い泳ぐ　鯉のぼり
幼なの瞳が　両手がおどる

保津川の新緑を逢い行く嵯峨野
眼下の舟人　手を振り返す

亡き人を　偲びつゆく　寒河江路の
月山　いまだ　白き　水無月

ふる里の　蛍火湧きいず　汀にて
幻想のなか　宇宙子となる

東悠分教会
田林美智子

5月28日

笠岡市文化連盟に加盟

雅　鶯　会

去る五月二十八日、雅鶯会（笠岡大教会雅楽部、楽長：谷内伸自）が、笠岡市文化連盟に加盟しました。

笠岡市文化連盟は、昭和三十七年、文化活動団体が集まって結成され、今年で四十年を迎えました。常時、活発に様々な催しなどを行っており、加盟団体数は七十を超えました。

雅鶯会は、すでに百年以上の歴史を刻んで居りますが、度々、この連盟に加盟の申込みをしながら、仲々受諾されずに今に至った訳ですが、去る五月二十五日、創立四十周年を祝う記念式典が行われたのを期に、新規加盟団体として受け入れられました。

入会したのは、市内在住の祭典奉仕者十名をはじめとする総員二十八名です。

これからは、笠岡市文化課、又、文化連盟が主催する「発表会」などに堂々と出演出来ることになり、土地処の人々との交流・にをいがけなどに、道が開けて来るものと考えられます。

往くくは、市内の学校の音楽の授業などにもつながりを持ち、或いは秋の「名月観賞の夕べ」など、多くのグループ・団体が出演する舞台への出演機会も出来て、日頃の研さんの成果を示す中で、大教会の存在を市民にアピールすることにもなるものと、期待がふくらみます。

今後とも、大教会につながる皆様の御声援、御支援をお願い申し上げます。

〝私のところでは〟

大往生

吉舎分教会長　時宗一実

〝今私のところでは〟の原稿を、と言われて、さて、さて、さて？　ピタリとペンが止って、あっという間に早や一ヶ月。〆切間近。そうだ！この話しか無いとようやくペンを持ち、いざスタート。心に浮んだその話とは、前会長である私の父より幾度となく聞かされた私の祖父・吉舎分教会初代会長、時宗才一郎の出直の時の様子であります。

昭和十三年冬、二月の大変寒い日、吉舎の駅へ人を見送りに出て、帰って来るなり震えが止らなくなり高熱が出て二週間程で急性肺炎の為出直したそうです。今晩が山ですと言われたその日、当時二十歳だった父が手をにぎり『お父さん、今上下から皆んな来てくりょってじゃけぇ頑張りんさいよ』と言うと止まりかけていた脈が再び動き出す、そんな状態をくり返えしながら最終電車でようやく上下分教会より会長様他九名の方々が駆け付けてくださいました。その方々一人一人に〝何々さんか、どうもありがとう〟〝あっ、何々さんも、ありがとう、ありがとう〟と声を掛け御礼を述べて、その当時唯一人の信者さんだったKおばあちゃんが〝会長さん、さぞかししんどうござんしょうのぉ〟と声を掛けると〝はぁー、まるで死ぬ時の様にしんどうござんすよ〟と皆んなを笑わせて、その当時流行していた歌を鼻歌まじりに〝あ～それなのにく〟と口ずさんで、父の手を握って〝一善、後は頼んだぞ〟と言って息を引き取ったそうです。極貧の中、四十過ぎの女房を残し二十歳の子供を頭に四人の子供を残して出直して行く時の気持はいかなものだったろうか？如何ばかりだっただろうか？と思った時、その出直の様（さま）の何と見事な、それは正に〝大往生〟と言えるものだったそうであります。神様にお引き寄せ戴いて、そして精一杯に通り切り、神様の御教えを信じ、出直を信じ切っていないと出来ない出直の様だなぁーと！そんな父親を誇りに思い、自分の息子（私）に話して聞かせる父。そんな父を通して祖父の事を誰よりも尊敬し誇りに思わせて貰っている私です。父（前会長）も、〝お父さんの様な見事な出直をさせて貰いたいものよのぉ〟と話しますが、その話を私も又、今年高校三年生になる息子に話して聞かせています。息子も〝すごいなぁー〟と感じる所がある様です。……？　我が教会自慢は、こうして初代様の話を心底尊敬して語り継いでゆける事だと思っています。さて、さて、今歩む私共の生き様がこの出直の様（さま）に恥じない様一生懸命歩まなければ！と改めて思い返しながらペンを置かせて頂きます。

福山分教会で会長就任奉告祭執行

笠岡支教会が設立のお許しを頂いた翌明治２５年１０月２４日、玉島・福山・髙屋・神邉の四教会が揃って名称設立のお許しを頂いた。

大教会では、昨年、創立１１０周年記念祭をつとめ了えたが、本年、創立１１０周年を迎える四教会は、それぞれに「記念の月次祭」や「記念祭」を執行する。

その口火を切って、去る５月１９日、福山分教会が六代会長就任奉告祭並びに創立百十周年記念の祭を、続いて６月１６日、神邉分教会が記念の月次祭を無事つとめ了えた。髙屋分教会は１１月１７日に記念の月次祭を、大教会に陞級した玉島は１２月８日に記念祭を、それぞれ予定している。

ここに、福山分教会の記念の祭の様子を報告していただいた。

５月１９日、大教会長様、奥様、前奥様、武内・岡本両ご随行の先生の御臨席を頂き、６００余名の参拝者と共ににぎやかにつとめさせて頂きました。

当日は前日の夏を思わせるような快晴に反してのどしゃ降りで、色々先案じをしましたが、おつとめが始まる前には上がり、当初予定していた通りに進みました。

奉告祭をつとめるに当たり、„おつとめの完修と３０万軒にをいがけ、陽気ぐらし講座開催“ を記念祭の年としての活動方針と定めました。そしてまずはおつとめ奉仕者からおつとめを勉強し直そうということで、大教会長様を講師にお迎えして、おつとめについて、鳴り物について、又祭儀についてお教え頂きました。現在も毎月月次祭前日をおつとめ練習日と定めて、陽気なおつとめがつとめられるよう、そして今後は部内教会へ赴いて、おつとめが完修出来るようつとめる予定にしております。

婦人会による踊り

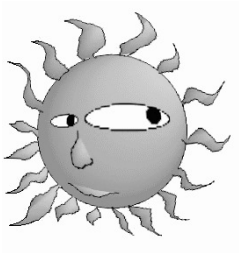
奉告祭に参拝して下さる方々に如何に喜んで頂けるかを練り合った結果、昔の写真の展示と、余興の最後に福引きを計画しました。写真については、旧神殿当時のものが見あたらず、又古い時代は写真が小さく、展示するには見にくいという問題などが起きましたが、パソコン処理でネガサイズの写真でも大きく引き伸ばす事ができたおかげで、年輩の方々には当時を懐かしむ声が聞かれ大変好評でした。

余興では鼓笛隊の演奏に始まり、台湾の方々の歌、ダンスや手品等があり、最後に福引きをしました。商品は各教会より持ち寄って頂いた物で、タンスや自転車、テレビデオや扇風機等様々な商品に歓声が上がり、賑やかな当日であったように思われます。

奉告祭を通してどんどん教会に寄って頂き、新会長様と共に成人の道を歩んでいきたいと思っております。

花束贈呈

ENGLISH SEMINAR



English Seminar（英語講習会）って知っていますか？
かれこれ今回で60回目を迎えます。
英語が好きな人も、またそうでない人も、楽しく英語を学びましょう。外国からゲストもやって来ます。パソコンも使います。お楽しみ行事も。終わる頃には英語で夢を見る人も！？

Let's enjoy English together!

募集要項

◇期　　間　８月５日（月）午前１０時受付～７日（水）午後２時頃解散。
◇受講対象　中学１年生以上、高校生、大学生、一般。
◇受講御供　２，５００円。
◇持 参 品　英和・和英辞典、筆記具、着替え、洗面具。
◇プログラム　★パソコンを使った英語の学習　★英会話　★おつとめ
★レクチャー　★ひのきしん
◇お問合せ　詳細はスタッフの　香 取 雅 人　☎(086-528-0850)
吉岡誠一郎　☎(086-282-0550)
（★連絡下さればJR大門駅まで送迎します）
◇主　　催　天理教笠岡大教会 海外伝道部
〒714-0066 岡山県笠岡市用之江377 ☎(0865-66-1311)

立教165年 こどもおぢばがえり

テ ー マ　おやさとに よろこびいっぱい ひのきしん
期　　間　７月26日(金)～８月４日(日)
列車団体　直轄･福山･久松 …… ７月26日～29日
髙　屋 …… ７月29日～８月１日
詰所模擬店　７月27日･29日･８月２日
いずれも、午後６時～７時半
・**食べ物**：たこ焼き、かき氷、フライドポテト
・**ゲーム**：輪投げ、スーパーボールすくい
・１回５０円
・青年会・婦人会・少年会、各ブロックひのきしんの皆さんのお力添えをお願いいたします。

五月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に会長上原理一慎しんで申し上げます

親神様の親心溢れる御守護とお導きを頂いて季節は確実に春から夏へと移り変わろうとしておりますし年頭から始まった教祖百二十年祭に向けての成人の歩みも昨年並みとは行かないまでも一歩一歩着実な歩みへと進みつつあります事は誠に有難く勿体ない極みでございます　私共は日々身上や事情に戸惑いを感じながらも「だん〜〜とせかいぢうをしんぢつにたすけるもよふはかりするぞや」との成って来る理に込められた親心に浴し喜びを感じつつ「かしものかりもの」のお礼と共にご恩報じを念じて日夜たすけ一条の上に届かぬながらも精一杯つとめさせて頂いております　その中にも今日の吉日はこれの教会にお許し下された五月の月次祭を執り行う日柄でございますので只今からおつとめ奉仕者一同喜び心も一入に明るく陽気に勇んで座りづとめてをどりをつとめさせて頂きます　御前には五月晴れの陽気に心躍らせつつ今日の日を楽しみに寄り集い共にお歌を唱和し日頃の御高恩に改めて御礼申し上げる皆の状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

又道の後継者育成を推し進める為今月は直轄巡教をさせて頂きましたがより活発な動きになる事を願って本日は本部より講師をお招きし学生層育成者講習会を開催させて頂きます　お聞かせ頂いた事をしっかりと心に治め実動へと繋げていく所存でございます　加えて明日明後日は婦人会全委員部長講習会を開催し練り合い等を通じて道の台としての後継者育成を目指す所存でございます更には又一名一人に心の自由を許されていながら世上の常識やお金・身上事情等に囚われ視野が狭まり心の自由を失って助け合えなくなっている現状を見るにつけ少しでも心の自由を取り戻し助け合う心になって貰うべく私共一人一人が世界救けの用木との自覚を一層高めたすけ一条に邁進させて頂く覚悟でございます

何卒親神様には旬々の親の声に素直に添いきる皆の誠真実を受け取り下さいましてたすけ一条の上に尚もの自由の御守護を賜り未だ道知らぬ人々をお引き寄せ下さいましてお望み下さる陽気づくめの世の状が一日も早く実現しますようお導きの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます

チョ・ちょ・一寸の話し

つい最近わが町K町の目抜き通りの一角でちょっとした珍事が起きた。ある民家の母屋へサッシの窓を突き破って野生ジカが乱入して来たのです。母屋の中を駆けまわり、又、又、サッシを突き破り出て行ったそうです。家の中はグチャグチャ、何の断わりもなく謝罪もなく、……まぁシカたないか！と言ったとか？言わなかったとか？　それと時を同じくして近くの国道に熊が出没し、車と衝突してそのまま逃げたとのニュースが流れた。車はかなり修理代がかかった事だろう！持ち主はクマッタ・クマッタと言ったとか？言わなかったとか？　だんだんと野生の動物達の住処が狭まり、こんな珍事が起るのであろう。地球全体に目を広げれば、加速度的に進む環境破壊。野生の動植物にとっても、ひいては人類にとっても由々しき事態になりつゝあるのでは！

我が身にしても、ここ数年前より突然悩まされ始めた花粉症・アレルギー症状等々、考えさせられる最近です。それにしてもやはり地球的規模で何かがおかしい。オカシイ。（前号引用！）